学会だより　Vol.4 / 1996.1.8　国士舘大学地理学会（編集：増田）

講演会・研究発表会・懇親会行われる

先日、12月16日(土)に、本学非常勤講師・長沢利明先生の講演会、３年ゼミ代表者による研究発表会、ＯＢの方や先生方と学生が集う懇親会が行われました。講演会・研究発表会の方には100人を越す方々、懇親会にも50人の方々が集まり、大いに盛り上がりました。

長沢先生は、台湾の少数民族について話をされ、家族制度や成人の儀式等同じアジアでも日本とは異なった生活習慣について非常に興味深く話をうかがいました。３年のゼミ報告は、準備が巡検から２ヶ月足らずで発表時間が１人10分という短さにもかかわらず、うまくまとまっており、レポートの書き方など下級生も参考にしてください。（３年・坂路）

２年生「地理巡検Ⅱ」報告

A．内田巡検報告（熱海・伊東編）－伊豆の認識調査

金井　宏

熱海・伊東巡検は、超個性派揃いの総勢10名によって１日目が熱海市、２日目が伊東市伊豆高原と、それぞれ異なった場所で調査を行いました。

調査内容は「伊豆の範囲に関するイメージ」です。２人１組になって観光に来た人や当地に住む人達にいきなりアンケート調査を行いました。やはり、現地に行き調査を始めた頃はなかなか慣れるのに大変でした。普通の方々に協力を快諾してもらうためには自分の言いたいことを的確に相手の方に伝えます。しかし、断られることもあるので我慢も必要です。あと調査の協力をしていただいた人がダブることもあるので注意が必要です。

夕食後は、アンケート調査の方法について学びました。計算の公式など難しいことが多く、先生へ質問が多く飛びました。

巡検１日目は坂が急な場所を結構歩いたので、宿に着いたときはフラフラだった。

B．瀬戸巡検報告－土地利用調査

後藤　和美

12月４，５日、瀬戸先生の指導のもと、総勢13名は甲府盆地で巡検を行いました。

１日目の調査地域は白根町で、駒場浄水場からスタートし、周辺の土地利用の状況を見るとともに、甲府盆地北西部の山麓に連なる扇状地群を横断している灌漑用水路の「徳島堰」の観察などが行われました。

２日目の調査地域は韮崎。市役所で、前日観察した「徳島堰」の用水路事業の概要を伺う事に始まり、釜無川の取水施設を訪れたり、扇状地地形の観察、バスの車窓から土地利用や地形観察などを行いました。

２日間“いろいろな出来事”がありましたが両日よい天気に恵まれ、歩き回ることができ、各人の調査（観察）ははかどったと思います。

C．長島巡検－中山間地域を見る、歩く、考える IN 群馬県新治村

五十嵐繁樹（群馬県人）

沼田駅に降りたった僕達に待っていたのは、「バスの車窓から見えるもので気がついたものを３つ探す」長島先生からのいきなりの課題だった。こうして、「新治村・エキサイティング巡検」は始まった。

最初に見学した場所は、農村改善センターだった。そこで僕達は、すごいものを目の当たりにした。次々と降りてくる自動式の客席、値段が4900万円!! ただただ感嘆の声を上げるのみだった。続いて、たくみの里へ。建物をまわりの風景に合った造りにするなど（屋根瓦の小学校とか）、村民の心づかいを感じることができた。宿に着き、夕食後のミーティング。僕は睡魔と戦いながら、なんとか長島先生の話を頭に詰め込んだ。

翌日は、班ごとの聞き取り調査。僕らは、再びたくみの里におもむき、匠たち（職人）の話を聞いた。一人一人の個性（？）や、新治村に対する考え方の違いを感じることができた。

役場でのミーティングが終わり、帰路に着いたが、そこはやっぱり群馬県、すぐにはバスはやって来ない。かくして国道17号を南へ南へ歩くことになった。

D．海風吹きつける三浦海岸・自然巡検報告

土屋　真紀

神奈川県三浦市三崎町、城ヶ島地域で行われた巡検には、野口・長谷川両先生のもと、男子24名、女子５名のあわせて29名が調査を行った。調査目的は、三崎町の植生観察と気温観測、城ヶ島の地形観察である。

１日目。青空教室から始まった植生観察は思うようにできず、突如として空いてしまった時間に苦しみ、その後、魚市場が並び立つ海側の気温観測では、海の匂いと魚の臭いでさらに苦しんだ（のは私だけか？）。

２日目。クリノメーター（と配布されたお弁当）を片手に開始した城ヶ島一周地形観察は、強く、冷たい風にあおられながらも何とか終了。しかし、砂まみれや生臭さに辟易した人も多かった（はず）。

今回の巡検で得たことは、行って・観て・触って記録する事の重要性である。が、やっぱり一番必要なのは忍耐力かもしれない……。

シリーズ・私の本棚③　怒濤の一挙７冊紹介!!

長谷川　均　先生（本学地理学科助教授：地形学、リモートセンシング、計量地理入門、地理実習、課題研究）

地理の学生向けに優等生的なことを書けば、**長島俊介「水半球の小さな大地」、村井吉敬「スラウェシの海辺から」（いずれも同文館、1987年）、鶴見良行「ナマコの眼」（筑摩書房、1990年）**。これらは少数者の側にたった太平洋の民族文化誌で、同じ著者達の本でベストセラーになった岩波新書のバナナやエビの本より数段上をゆく優れた調査記録だと思う。読んだ後、「社会科学をまじめに勉強すれば良かったなぁ」としみじみ感じ入った記憶がある。少し毛色は異なるが、**「オセアニア世界の伝統と変貌」（山川出版社、石川栄吉ほか、1987年）**は、同じ時期に大著ながらまじめに全部読んでしまった。

ところでこの夏に出た、**大城立裕**の昔の短編を集めた**「二十日夜」（中央公論社）**は、読み始めたらハマッテしまい電車を乗り越した。四十前の人にはわからない世界の話で、年をとるのもまんざら悪くないと思った。年をとって良かったなどと思うことは滅多にないが、これはそう思ったことのひとつ。

“超”シリーズで大金を手にしたに違いない経済学者の**「超勉強法」（野口悠紀雄、講談社、1995年）**は、感心した。出た翌日にたまたま本屋でみて、斜め読みしてすぐに買うことにした。ぼくも日々勉強している“勉強のプロ”であるが、非常に単純な人間なのでこの本を読んで勉強への意欲がますます増してしまった。自信を失いつつある人間に生きる勇気を与えてくれる名著であると言っても言い過ぎではない。と、ここまで書いたら言い過ぎだ。この正月休みには、楽しみにとってある**「マシアス・ギリの失脚」（池澤夏樹、新潮社、1993年）**を読んでやるのだ。

寄稿記事／ジオグラファーズ・アイ②

遺骨収集 シベリア・チタ州派遣報告

２年　清水川 令

去る8月16日から9月6日までの間、厚生省が行っている遺骨収集事業に日本青年遺骨収集団に加わって、ロシアのシベリア地域、チタ州のペトロフスク地方に滞在してきた。このペトロフスク地域といっても具体的にはペトロフスキー・ザヴォートという街であるが、地図上ではバイカル湖(イルクーツク)の東方600km程のほぼ109°Ｅ・51.5°Ｎにある人口約3万人弱の街である(地図帳によっては、ペトロフザバカリスキーとなっているものがある)。

なぜこのようなシベリアに日本人の遺骨があるのか、それは第二次世界大戦終了時点まで当時の満州を含む中国に駐留していた日本兵が終戦と共に南下してきたソビエト側に捕虜として旧ソビエト各地に連行されていったことによる。抑留者は戦時中に自分が所属していた部隊とは無関係に、だいたい1000人ずつにまとめられて、旧ソビエト全土（ウラル山脈を境に東いわゆるシベリア地域と中央アジア地域が主な連行先）に分散させられ、鉄道建設、鉱山、炭鉱などの重労働を強いられていた。まさに戦後のソビエト発展の一担い手になっていたのだ。抑留者数は厚生省調べで、全ソビエトに57万5千人で、その内の約5万5千人が極寒に耐えられず、また食糧事情の悪さ、過酷な労働で亡くなっている。これらの死亡者は、同じ日本人の手で埋葬されていた。

今回の目的地のペトロフスキー・ザヴォード(以後ペトロフスクと省略)はイルクーツクからの風景とまったく変わらず、なだらかな丘陵地帯の中にある街である。人口約3万人弱、主産業は製鉄ではあるが、原料は遠隔地から鉄道輸送によって行われており、出荷も同様の形態がとられていた。チタ州は、スラヴ系民族よりもモンゴル系が多いと言われているが、地域によってはそうではないように思われる。ことにここペトロフスクの場合、スラヴがほとんどであった。それには歴史的背景を持っているからだと思う。19世紀にフランスがからんだデカブリスト党の流刑地になり、囚われの身となった党員の妻たちが、レニングラード(サンクトペテルヴルグ)方面からこのシベリアのペトロフスクまで、夫たちを案じて追って来た、というのである。そういうこともあり、街の中心部にはデカブリスト博物館なるものが存在している。街の形成は、旧町、新町というように２つからできていた。これには地形的な影響が関係あると思われた。気候ではDwcではあるが、シラカバなどの広葉樹の混合度が比較的高いように思えたのでDwbではないかと思われる。夏期には日中平均25～27℃まであがり、夜間は10℃前後まで下がる、といった具合で、朝に霧が立ち込んでいる状態がほとんどであった。一日の天気の予測は、安易に霧が立ち込めていれば日中(午前10～11時から)晴れてくると立てられ、霧がないとかならず雨になるということが分かった。なお、高緯度なので夏期には白夜になり、夜10時になってやっと真っ暗になるといった状態であった。また、降雨がある割には湿度が低く、体調維持に苦労した。

現地についてからは、厚生省と現地赤十字社、ならびに現地有力者とのミーティングでまる１日我々はフリーになる予定であったが、それもつまり、次の日からはすぐに作業にとりかかった。ホテルから約30分程バスで山へ登り、今回の作業現場「1484野戦病院跡地」に到着。スコップを持って掘っていくわけだが、掘れども掘れども出て来ず、約１ｍをすぎたころから木の朽ちたものが出てくるようになる。初めのころは気にもとめず掘っていたが、のちにこれはくいで、埋葬者の頭の位置を示すもので、すなわちこれが出てくるか来ないかで埋葬されているかどうかの判断材料になった。というのも、現地には一応土まんじゅうがつんであるが、これは後になってつくったものであり、半分は掘っても出てこないのであてにはならなかった。このようななかで何も知らず、掘っていって約１ｍ40cmぐらいまで掘り下げてやっと頭部がでてくる、といったものでした。始めに掘り出した所は、

１柱（このような作業の場合、１体、２体とは数えず、１柱、２柱…というように『柱』で数える）ずつの埋葬形態であったが、埋葬形態には１柱ずつ埋葬する個別埋葬と、大きな穴に何柱もまとめて埋葬する集団埋葬の２形態があります。作業前半は個別埋葬地を、後半に集団埋葬地というように行いました。集団埋葬の場合は、遺体がおりかさなっていたり、手がとんでもない方向に向いていたり、首が離れたりしていて、骨上げを行うときに他の柱といっしょにしないよう上げなければならないので大変でした。遺骨の状態は風土がらとても良く、頭からつま先まできれいに出て来ました。さらには、頭髪がたくさん残っている柱もあり、特殊な例としては義眼をつけている柱や、ひざから下がミイラになっている柱、特に、死後解剖で頭骨の上半分が切断されている柱もあり、そういったものはとなりに切断した上の頭骨も一緒においてあった。毎日平均20柱ぐらいで多い日になると40～50柱ぐらい上げた日もあった。これらの遺骨は、焼骨してから日本に持ち帰ることになっているので、だびにふすことになるが、本来は最後に行うのが今回は多いので、ほぼ毎日行っていた。太く長い松を約１m50cm間隔で50mぐらいにつなげ、その上に細くて長さが２m程の松をハリにして並べるということを数回くりかえし高さが約70cmぐらいまでにつみかさね、隙間には小さい木や松の葉などを入れて、幅２m、高さ70～80cm、長さ50～70mの巨大な焼骨台をつくり、その上に、１柱１柱頭は東に向くように並べて点火。点火には灯油を用いた。収骨と焼骨を同時進行させるために全体で２グループに分かれ、焼骨グループと収骨グループに分かれ、１日交替で行った。

このようにして、15日間の作業で予定柱数279柱をすべて回収することが出来た。

我々が宿泊していたホテルは、旧ソビエト時代には国営の立派なホテルであったが、旧ソビエト崩壊後経営から国が引きさがると、管理がひどく我々の来る２ヶ月前には食堂が火事になり使用不能となり、我々は町の労働者の集会所みたいな所で食事をとるといったありさまであった。メニューは、何だか良く分からないが、黒パンが毎日、そばの実を蒸したもの、ジャガイモをすりつぶしたもの、米、川魚、トマト、キューリなどが出て、スープは油っぽいものであった。それに直径５cmもある腸詰めなどが出た。食後は必ず紅茶が出た。これはどこでも同じようで、シベリア鉄道内でもそうであったが、コーヒーよりも紅茶が多かった。しかもこれだけはとてもうまかった。雨が降ると当然作業ができなくなるので必然的に休息日となり、バーニャ（サウナ）へ行った。シラカバの葉で仲間と思いきりたたきあったりしてとても気持ちが良かった。又、酒やタバコを買うため良くマーケットへ行ったが、あいかわらず面倒くさいシステムで品物の値段を見てから、その値段分の金を払ってレシートを受け取り、それを持って品物と交換をする、という行ったり来たりしなければならないものであった。又、これらのマーケットに行けばだいたいのものは売っているが、なかにはオートバイも売っていて、しかもどういうわけか箱詰めされて売っていた。ちなみに１ドルが約4000ルーブルというとんでもないインフレになっており、マルボロなどの洋煙草は1箱12000ルーブルとちょっとオソロシイ価格がついていたりした。ビールはオーストリアからのものが多く、まあうまかったが、ウオトカ（ウォッカ）はまず腰からくだけていく、という感じで、注射をうつときのアルコール脱脂綿のキツイにおいと同じであった。

このように約３週間、しかも初めての外国でもあり、落ちつかないこともあったが本来の目的を認識し、今回の事業を遂行できたのだと思う。もちろんＯＢの方々や先輩方のご指示があってのことではありますが、これからもこのような事業に積極的に参加していくつもりです。

編集後記　「国士舘大学地理学会・活性化元年」の今年、学会誌・学会だよりの発行、懇親会をその目玉に据えて取り組んできた。12月に行われた懇親会は当初予定を大幅に超え50人の方に集まっていただいた。来年度以降へ向け手応えを感じることができた。学会誌は、遅くはなったが今年度中には発行できる予定でがんばっている。学会だよりは今年、試行錯誤しつつ4回発行したが、どうだったのかご意見等を寄せてください。来年度は定期発行、内容充実をめざしたい。